

はじめに

2022年12月に入会した山本健一です。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。このたび、エッセイの執筆に依頼を受け、私と音楽の関わりについて、振り返ってみたいと思います。

1 音楽との最初の出会い

1961年に生まれた私にとって、「音楽」のことを最初に意識したのは「グループ・サウンズ」でした。ブルー・コメッツをはじめ、多くのグループがありましたが、私は「ザ・タイガース」が一番好きでした。やはり、タイガースと言えば、ジュリー（沢田研二）がカッコよく、小学校低学年の子供ながらも憧れました。また、タイガースは、曲そのものも良かったため、今でも好きでよく聴いています。（タイガースで一番好きな曲は、「美しき愛の掟」です）タイガース解散後のP Y G、沢田研二がソロになってからの曲も好きです。

2 筒美京平との出会い

グループ・サウンズのブームが去ったあと、天地真理、アグネス・チャンなどの女性アイドルブームが到来し、多くの女性アイドルがデビューしました。私はそれほど夢中になりませんでした。南沙織だけは好きでした。小学生の私にとって「誰が作詞・作曲しているか」などの知識は当然なく「イイ曲だなあ〜」という程度でしたが、あとになって、南沙織の曲の大半は、筒美京平の作曲であることを知り、結局のところ私が好きだったのは、筒美京平だったことに気づきました。

3 ロックとの出会い

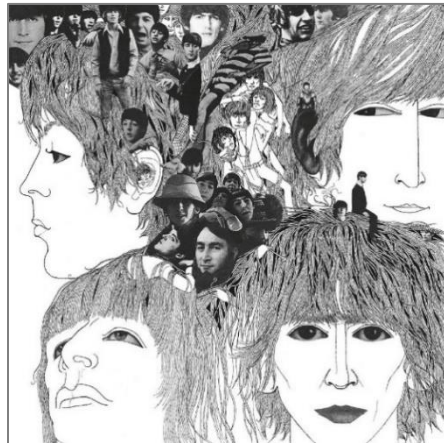
（1）ビートルズ

中学校に入学してからは、新しい友達もでき、小学校とは世界が変わりました。仲の良い友達の家遊びに行ったとき、その友達は、ステレオの裏側からラジカセにケーブルを接続してレコードの曲をカセットテープに入れようとしたのですが、何度やってもうまくいかず悪戦苦闘していたため、A面の1曲目を何度も聴かされました。そのレコードはビートルズの青盤で、1曲目が「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」でした。最初は、何だかよくわからない難しい曲だと感じましたが、何度も聴いているうちに、何となく好きになりました。その後、接続がうまくいき、LP2枚分をカセットテープに無事、入れることはできましたが、ストロベリー〜以外の曲は、あまり印象に残りませんでした。そのときはそれだけで終わりましたが、後日、その友達から「シー・ラブス・ユー」や「ハイ・ジュード」などの曲を教えてもらい、完全にビートルズファンになりました。

その友達に「最初にビートルズのアルバムを買うなら、何がイイの？」と質問したところ、「やっぱり最高傑作であるサージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ クラブ・バンド

でしょう」と言われ、サージント～と前期のベスト盤である「オールディーズ・ビートルズ」を買いました。これが私にとって、最初に自分の意志で買ったLPでした。オールディーズ～はシングルのヒット曲で構成されていて、中でも「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」には衝撃を受けました。一方、サージント～は、初心者にはその良さが理解できず、最初は好きになれませんでした。

それからは、お小遣いを貯めて、「アビー・ロード」や「ヘルプ」などを買いましたが、私がビートルズ、もっと言えば「音楽そのもの」にどっぷりハマることになったきっかけは「リボルバー」でした。よく、「ビートルズのアルバムで、何が一番好き？」という話が出ますが、私は中学3年生のときにリボルバーを聴いて以来、一貫してリボルバーが最高傑作だと今でも信じ続けています。



私にとってのビートルズの
最高傑作「リボルバー」

(2) クリーム



ジャズへの入り口となった
「ライブ クリーム VOL.2」

ビートルズにハマってからは、徐々に他のバンド・ミュージシャンのことに興味を持ち始め、最初にビートルズ以外で好きになったのは、エリック・クラプトン、ジャック・ブルース、ジンジャー・ベイカーの「クリーム」でした。それまで音楽と言うものは、楽譜を完成させ、その楽譜どおりに演奏するものだと思っていましたが、クリームのライブ盤（L I V E V O L . 2）を友達の家で聴いて、「アドリブ」で演奏する音楽に初めて触れました。クリームはのちに、私がジャズに興味をもつきっかけをつくってくれたありがたいバンドで、今もよく聴いています。

(3) ハードロック

ビートルズ、クリームの次に好きになったのは、レッド・ツェッペリンなどの「ハードロック」、そのハードロックの源流とも言える「ジミ・ヘンドリックス」でした。高校2年生のとき、レッド・ツェッペリンの映画「永遠の詩」が公開され、私は映画館で何度も観るくらい大好きでした。ジミ・ヘンドリックスに関しては、高校の頃は、レッド・ツェッペリンほど好きではありませんでしたが、50歳を過ぎた頃から良さが深まり、還暦を過ぎてからは、より一層好きになりました。

(4) プログレッシブロック

ハードロックが好きになるのと並行して好きになったのが、「プログレ」でした。プログレのアルバムを聴くまでは、LP 片面に数曲が入っているのが当たり前でしたが、最初買ったプログレのアルバムは、イエスの「リレイヤー」で、A 面 1 曲、B 面 2 曲で、「何かとんでもないものを買ってしまったなあ〜」と思いました。最初は 1 曲が長いので、あまり馴染めませんでした。何度か聴いているうちに好きになり、「危機」「こわれもの」などイエスの LP はほぼ制覇いたしました。

イエス以上に好きになったのが、キング・クリムゾンでした。キング・クリムゾンと言うと、「クリムゾンキングの宮殿」が有名ですが、私は「暗黒の世界」「太陽と戦慄」「レッド」「USA」などジョン・ウェットン、ビル・ブルフォード、デヴィッド・クロスがいた頃が特に大好きです。

プログレの大御所ピンク・フロイドに関しては、「原子心母」「狂気」を聴いてもピンとこなかったため、当時はあまり好きになれませんでした。

つい数年前、会社のロック好きな人と話しているときに、「好きなギタリストは誰ですか？」と私が質問したところ、その人は「デイブ・ギルモアですね」との回答があり、「山本さんならアニマルズやザ・ウォールなら好きになると思いますよ」と教えてくれ、その 2 つを聴いて一気にピンク・フロイドにハマりました。それからは、高校生からの 40 年分を取り返すようにピンク・フロイドを聴きまくっています。



キング・クリムゾンの傑作
「太陽と戦慄」

3 ジャズとの出会い

(1) アート・ブレイキー

高校 2 年生までは、「ロック一筋」でしたが、イエスの「こわれもの」のライナーノーツにメンバーのプロフィールが書かれており、私が大好きなドラマーであるビル・ブルフォードの部分に、「影響を受けたドラマーは、アート・ブレイキー」と書かれていました。私が尊敬しているビル・ブルフォードに影響を与えたアート・ブレイキーなるドラマーは、どんなドラマーなのか、とても気になりました。

それからしばらくして、今はなき、大井町にあった「ハンター」と言う中古レコード店でアート・ブレイキーの LP を見つけ、失敗してもイイからと思って買いました。そのアルバムは、「パリス・ジャム・セッション」と言う、パリでのライブ盤でした。このライブ盤は、ジャズ・メッセンジャーズがヨーロッパツアーでパリを訪れた際に、当時パリにいたバド・パウエルとアルトサックスのバニー・ウィランをゲストに迎え、1959年12月18日のコンサートを録音したものでした。それまでジャズをまったく聴いていなかった私にとって、アート・ブレイキーのドラムは、上手いのか下手なのかもわかりませんでした。バド・パウエルのピアノには「凄み」を感じました。このアルバム、バド・パウエルがきっかけでジャズに興味を持ち、高校 3 年生からは、ロックに加え、ジャズにもハマるようになりました。

ジャズにハマるきっかけをつくってくれた
ジャズ・メッセンジャーズの
「パリス・ジャム・セッション」



(2) V S O P

アート・ブレーキーの次に知ったのが、ハンク・ジョーンズのグレート・ジャズ・トリオとハービー・ハンコックのV S O Pでした。高校3年生の1979年、V S O Pの来日があり、昼の部ではありますが、切符を入手することができました。今はなき田園コロシウムで生のアメリカジャズマンを見てからは、ロックよりジャズにのめり込んでいきました。



V S O Pの田園コロシウムでの貴重なライブ

(3) ジョン・コルトレーン



グレート・ジャズ・トリオ、V S O P以降は、様々なミュージシャンを聴きまわりました。中でもジョン・コルトレーンには絶大な影響を受けました。ジョン・コルトレーンに関しては、膨大な数のアルバムが発売されているため、全貌を把握するのは大変です。私はいつの時期も好きですが、やっぱり一番好きなのは、1961年、エリック・ドルフィーと一緒にやっていた時期です。

ジョン・コルトレーンとエリック・ドルフィーが共演したビレッジ・バンガードでの貴重なライブ

(4) マイルス・デイビス



ジョン・コルトレーンと同様に、これからの音楽史にも残る偉大なジャズマンであるマイルス・デイビスも、無数のアルバムが発売されているため、私は今でも全貌を把握し切れていません。1970年に発表された「ビッチェズ・ブリュー」からは、いわゆる「エレクトリック期」に入り、それまでのファンからは賛否両論がありました。私はエレクトリック初期の「ジャック・ジョンソン」が意外と好きです。

エレクトリック初期の「ジャック・ジョンソン」

(5) 日本人

アート・ブレーキーがきっかけでジャズが好きになり、最初はアメリカのジャズマンを追いかけていましたが、1970～80年台は、FM東京で日本人ジャズマンのライブを毎週日曜日の夜に放送していたため、山下洋輔や渡辺香津美などを録音して聴いていました。また、NHKでは入場無料の公開放送もありましたし、新宿・六本木の「ピット・イン」、今はなき「T A R O」、西荻窪の「アケタの店」などの小さなクラブにも出向き、間近で聴いていました。

私は、日本人ジャズマンに関しては、若い頃は日野皓正、山下洋輔からの影響が大きかったですが、50歳を超えた頃になって、やっと富樫雅彦の凄みがわかりました。

富樫雅彦の名盤
「ソング・フォー・マイセルフ」



おわりに

今回は、音楽との最初の出会ってからロックとジャズを中心に書かせていただきました。私が所有しているレコード・CD約2500枚は、ジャズが5割、ロックが3割、残りの2割は、ポピュラー、クラシック、民謡などなどです。

ジャズやロック以外の音楽にも幅が広がれば、これからの人生も楽しくなりますので、皆様から良い音楽を教えていただければ幸いです。



2023年5月28日の分科会にて